

阪本裕文  
編

IV	松本	I
集成	全四卷	著作
III	俊夫	II

二〇一三

一九五三

森話社

松本俊夫は東京大学文学部美学美術史科を卒業後、新理研映画に入社し、実験工房のメンバーと共にPR映画『銀輪』（1955）を演出する。その後、記録映画作家協会とその機関誌『記録映画』において、社会主義リアリズムを乗り越えた前衛記録映画の理論を展開し、『西陣』（1961）や『石の詩』（1963）などの記録映画を発表してゆくが、やがて作家協会内部の対立を経て、新たな運動の場として映像芸術の会を立ち上げる。本巻では『記録映画』や『映画批評』等の雑誌に掲載された、この時期の松本の著作を取録し、『映像の発見』（1963）と『表現の世界』（1967）に再録された論文の初出に加え、「作家の主体ということ」など、単行本未収録の論文・記事を多数収録している。本巻によって芸術と政治の狭間にあった松本が、アヴァンギャルドとドキュメンタリーの統一をいかに模索していったのか、その過程が明らかになるだろう。

1980年代以降の松本は、九州芸術工科大学や京都造形芸術大学で教鞭をとりながら、教育を通して芸術運動を支えてゆく。その一方で、これまでの思考を記号論的な方向へ向かわせた実験映画・ビデオアートを発表し続け、その思考は意味の迷宮のなかを彷徨う劇映画『ドグラ・マグラ』（1988）に結実する。そして、それは最新作である『蠅螂の斧』（2012）に至るまで持続している。本巻では『月刊イメージフォーラム』や『映像学』を始めとする雑誌に掲載された、現在に至るまでの松本の著作を取録し、第五著作集『映像の探求』（1991）と第六著作集『逸脱の映像』（2013）に再録された論文の初出に加え、海外映画祭カタログに掲載された「日本実験映画の黎明期」を始めとした単行本未収録の論文・記事を多数収録している。本巻は、複眼的な思考の果てに、松本の思考がどのような地点にたどり着いたのかを明らかにするものである。

◎ 収録論文・記事は年代順で全四巻にまとめ、各巻の掲載順を時系列にすることで、当時の時代状況や論争の過程、関心の変遷を理解することが出来る目次構成となっている。

◎ 各巻の巻末には、編者による各論文・記事の詳細な解説付き。

◎ 単行本未収録論文・記事多数。単行本収録論文を含め、すべて初出を底本とした。

## 日本実験映画界の重鎮・松本俊夫の著作活動を網羅した集成

# 前衛芸術論

# ハードコア

## 芸術的闘争の歴史的記録であるとともに新たな「発見」の書

『松本俊夫著作集成』全四巻

阪本裕文 編／A5判／各巻六〇〇頁程度

本体予価六〇〇〇円

第I巻「一九五三—一九六五」(各巻の年代区分変更の可能性あり)

二〇一六年五月上旬刊予定

森話社 shinwasha

※最寄りの書店にてご購入下さい。

お近くに書店がない場合や、お急ぎのときは直送も承ります。

101-0004 東京都千代田区猿樂町 1-2-3

Tel.03-3292-2636 / Fax.03-3292-2638 / www.shinwasha.com

映像芸術の会の運動が終わりに向かう一方で、草月アートセンターによってアンダーグラウンド映画を始めとした新しい芸術の動きが紹介され、映画の変革は最高潮に達しようとしていた。松本はこの動向を集約すべく『季刊フィルム』の創刊に参加するほか、「つぶれかかった右眼のために」（1968）や、初の劇映画となる『薔薇の葬列』（1969）、万博せんい館の『スペース・プロジェクション・アコ』（1970）といった作品に、越境的に取り組んでゆく。本巻では『季刊フィルム』等の雑誌に掲載された、この時期の松本の著作を取録し、第二著作集『表現の世界』（1967）と第三著作集『映画の変革』に再録された論文の初出に加え、「ジャパンコープ総会への提言」など、映画運動に関わる単行本未収録の論文・記事を多数収録している。本巻は、1960年代後半の領域横断的な芸術の展開を、松本の言説を軸に明らかにするものである。

1970年代に入って松本は創作活動に集中し、劇映画『修羅』（1971）を始めとして、『メタスタシス=新陳代謝』（1971）、『アートマン』（1975）、『ファントム=幻妄』（1975）といった実験映画・ビデオアートの傑作を次々と発表する。そして、『季刊フィルム』の後継誌である雑誌『芸術倶楽部』の創刊にも参加し、芸術運動を創作と理論の両面から支えてゆく。本巻では『芸術倶楽部』や『SD』等の雑誌に掲載された、この時期の松本の著作を取録し、第三著作集『映画の変革』（1972）と第四著作集『幻視の美学』（1976）に再録された論文の初出に加え、第二次『映画批評』での連載『戦後の映画雑誌』を始めとする単行本未収録の論文・記事を多数収録している。本巻は、記号学の導入によって、映画を批評する言葉が大きく変貌してゆく動きの中で、松本の思考と実践が深められて行く過程を明らかにするものである。